一足す一は一

柏文子

赤いギンガムチェックの布で、ベッドのまわりにヒラヒラしたフリルの飾りをつけたのは、もう一年も前のことである。住み始めたその日から、このベッドも狭い和室も私はとても気に入っていて、深い眠りも堪能することが出来る。もしこの世に携帯電話というものがなかったら、私は仕事に行くのも忘れて、ついうっかり朝寝坊をしてしまうことだろう、あまりの心地良さに目覚まし時計なんかさっさと止めてしまって。

今朝もケータイに起こされることになる。もうあと一歩で現実に戻れそうな眠りから早く抜け出そうと頭に神経を集中させながら、手探りでベッドの上のケータイを握りしめた。

「オレ、オレオレ」

電話の主は言う。私はベッドで毛布にくるまったまま。

「オレ、オレオレ」

繰り返している。

「バカね、さとちゃんでしょう。朝から何をふざけているのよ」

バレたか！　だなんて、

「ますますバカ！　何なのよ、いつもより早いじゃない」

「今日は、マキちゃんオフだよね」

覚は、いつも私のオフの日を正確に覚えている。私の仕事のある日だって毎朝かけてくる。前夜ベッドに入る前に丁寧にセットした目覚し時計を、いつも鳴り始めると同時に止めてしまうのは、覚からのコールを期待するというか、信じているからなのだろうか。

私は冬の終わりから春が間近いこの季節は植木屋さんの仕事を手伝っている。植木屋さんになるつもりはないけど、職人さん達が仕事をしている現場のあと掃除と、ライトバンでの木枝などのゴミ運びを結構気に入っている。仕事先は一日二ヶ所、それも一ヶ所につき午前と午後の二度にも及んで、庭が広くて立派だったり、料亭の庭だったりすると、ダイエットになるなんて喜んではいられない位かなりの労働である。でも私は田舎育ちで、いつかあの、ばーちゃんのいる山や田畑の中へ戻りたいと思っているので、この戸外の仕事は気持ちがすっきりするのである。田畑の緑は無垢そのもの、すべてを受け入れるやさしさと、無言の内になぜか厳しささえある。そんななつかしい緑色。

「オフだよ」
「俺もオフだし、いつもの公園で逢おうか、昼飯はラーメンおごる」
覚は、浪人くずれで、ラーメン屋でアルバイトをしている。別にラーメンを上手に作りたいという意欲もなく、ただ手伝っていて。バイクでの配達が得意というか、事故などを決して起こすことなくスピード感があり、それは店の誰からも認められている。彼はバイクで外を走るのは、空や風がなつかしい田舎の山や畑に通じていて気持がいいからだという。
覚と私は、ふる里の村で、高校三年生の時の恋人同士である。恋人だなんて言葉をこんなに軽々しく使っていいのかは分からないけれど、とにかく私達はほんとに心からの友達だった。
「今日はお客さんになっていくのね」
「そう、かっこいい恋人を連れてさ、いつも店で当てられているからナ、今日は遣り返しだ」
「もう恋人じゃないわよ」
「ゴメン、そうだったナ、十年も前のことだ」
覚の声が気のせいか少し寂しさを帯びている。
「正確には十二年でしょ？」
「そうだった。何で別れたと思う？」
「さとちゃんが頼りないから」
「じゃ何で同じ街でアルバイトをしているの、俺の後を追っかけてきたようなもんじゃない？」
「さあ、お互いにやっぱ心のふる里だから：：なんちゃって。こんなご時世だからね」

覚との約束は十時だったけれど、最近、大家さんの奥さん、つまり吉屋美代子さんとお話する機会がなかったので、少しおしゃべりしておこうと思い、少し早めにドアのカギを閉めた。私の小さなバストイレ付きのアパートは吉屋家の敷地内にあって、一階は三戸共、私が一年前に借りた時からずっと空き部屋、そして二階の三戸の内の一つは、最近専門学校生の女の子が学校を辞めて郷里に帰ったので空き部屋、そして一つは大家さんが納戸として使っている。
おまけに子供達の巣立った後の夫婦二人暮らしの吉屋さんのご主人が蒸発：：理由は私は知らないけれど：：というか家出をしてしまったので、吉屋美代子さんと私の二人がこの屋敷内に生活していることになる。なんとも広いような狭いような空間に私は住んでいることになるのだ。そうそう、吉屋家の愛犬タローも脱走して一ヶ月になるのだ。

高所恐怖症気味の私には少し苦手なアパートの階段を、カタカタ靴の音をさせて降りると、吉屋家の広い庭を通って門から通りに出ることになる。大抵その庭か庭に面した部屋のガラス戸近くのロッキングチェアで美代子さんは気持良さそうにゆったりとしている。ガラス戸の中の彼女に軽く会釈をして歩をゆるめて、私は美代子さんが話しかけてくれるのを待った。案の定彼女は、慌ててつっかけを履いて、庭に出て来てくれた。

「もうお出掛け？　いいわね、デート？」

「えっ？　まあ、おはようございます。タローはまだ帰ってこないのですか」

「まだ！　かしこい犬だから、帰ってくるってみんな言うのよね、ただジステンバーとかいろいろ伝染病をもらってくるかも。野宿して野犬と群れるでしょうから」

「心配ですね」

「ええ、でもタローは柴犬だから野生の血が流れているのよね、どちらかと言うと、広い草原を駆けるのが性に合っている犬なのよね」

そう言って彼女は、目を細めて遠くを見つめた。ご主人もそうなのだろうか？　柴犬に似て。それにしても一体どうしたのだろうか？　私から話題にすべきことではない。彼女も最初は、主人は出張なのと言っていて、その後、実はどこかへ行っちゃったのと言ったきり、いつも何も話さないものだから。

急に目を輝かせて、微笑みさえ浮かべて美代子さんが言った。

「それはそうと、白井さん、あなたねぇ、私達でやっているボランティア手伝ってくれない？」

「ボランティアですか、何をやっているんですか？」

私がびっくりして声を大きくして彼女に近づいたので、今度は白井さんと呼ばないで、マキさんと言ってくれた。親しさが増したようだ。

「マキさん、あのねぇ、ボランティアなんて言うのは少し大げさなんですけどね、実は女四人で箱に布を貼っているの、お菓子の箱や牛乳パックを適当に切ったのやら何でもいいの。着古した洋服を切ったり安くてかわいい端切れを買ってきたりしてボンドで貼るだけ。小物の入る楽しい入れ物が出来るでしょ、そしてね、いろんな施設のバザーに差し上げるの、高い値札の付けられるようなものじゃないけど、結構人気があって、あっという間に売りきれちゃうっていうか、まあ、バザーのアトラクションというか、人目を引いてそのイベントを盛り上げてる感じ、ですから、知人を通して様々なバザーをやっている人に差し上げると喜ばれてあてにされているのよ。まあ、作りながらおしゃべりして情報交換するのが楽しみなの、お茶飲みも楽しみでね」

これを聞いて、なんだか私は胸がわくわくした。女四人のグループというのは、もう社会人になっている子供達が小学生の頃からのＰＴＡの仲間だから、長い付き合いなの

だそうだ。厳密には吉屋美代子さんと同じ専業主婦の川田百合子さん、昔からずっと塾の講師をしている井川眞知子さん、それに同じ五十代後半でもバツイチ一人者の本屋の店員をしている岡田信子さんがそのメンバーだ。

そもそも岡田信子さんが、勤め先である本屋の二階を借りて住んでいて、その場所を提供するからってボランティアの作業に乗り気だったそうだ。そうそう、信子さんは本が好きで本屋の店員をしているのだけど、他の人達も本好きでベストセラーはいち早く手に入れるため信子さんの店にやってきて彼女とも気が会ったし店先でのおしゃべりから自然発生的に生まれたボランティアなのだ。

自分達だけでバザーをやってその売上金を何かいいことに寄付してもいいわねぇとか、それらの作品をお土産に持参して、養護老人ホームへ話し相手をしに行くようにしない？とか思いは尽きないようなのだ。

六十近いおばさん相手に嫌じゃなかったら、お茶飲みがてら寄ってみてね、と美代子さんは誘ってくれた。知らない街で少しでも知人がいたほうがいいだろうと思ってくれたのだろう。私はその心遣いを素直に受けたかった。夕方四時前に行く約束をして、私は吉屋家の屋敷をあとにした。

私と覚の待ち合わせ場所は、いつもお互いのアパートからそんなに遠くないその公園に決まっていた。まわりの木々がおい茂って高くそびえている。公園デビューした子供達が可愛い両手を伸ばしてしがみついても三、四人分ははるかにある太い幹。そんな木々があちこちにある。分厚いものを着込んだ老人達が数人、あちこちのベンチで流れる時間に一体となってしまっている。公園のハトは、この季節は、背中をまるめてうつむきクックッとまるで苦しそうにうめいている。数十羽のハトが同じポーズをしているのに私は目を見はってしまった。ベンチにかけて覚もハトに見入っていた。

「覚君、さとちゃん」

「オッス！」

私は覚のそばに腰かけた。コートやマフラーを付けて、弱い日だまりを見付ければ、若い私達は寒さなんて気にならない。今日私達に与えられた公園のスローな、スローな時の流れ。

これと言っていつも話すことはない。大抵は私が覚にお説教じみたことを言ってしまうだけだ。昼にラーメンをごちそうしてもらうまでには、まだ時間がたっぷりある。

覚は高校時代は、かなり成績がよくて、ちゃんといい学校を出て窮屈そうなネクタイを首に巻き付けていそうな人間だったはずなのに、ラーメンを上手に作ろうともせず、ただ、田舎に通じる空と風が好きで、配達を得意としているのだ。それが悪いとは、私

は思わないけど、フリーターだからさしずめ給料が順調に上がっていかないのは覚のためにも良くないのではと、私はありきたりの世間並みの思惑を抱くのであった。覚に両親はいなくて私にも両親はいなくて、二人ともおばあちゃんがいる。そんなことも高校三年生の私達が心を結び付けた理由の一つだったと思う。

「いつか店を持つ夢を持つとか、ラーメンをちゃんと一人前に作ろうとか何でしないの、さとちゃんたらいい齢して」

私は又、いつものように覚をなじり出す。そんな時覚は少し困ったような顔をするが、すぐに寂しそうな眼をする。それをとても愛おしいと私は思う。

「さとちゃんに逢う度にね、私、高校時代に英語の教科書で読んだアフタートウェンティイヤーズの話を思い出すのよね」

「O・ヘンリーの小説ね」

「そう、やっぱ、文豪は、すごい」

「俺が指名手配中でマキちゃんがポリスマンな訳？　俺そんなに悪いか？」

「違うわよ、そんなこと言ってない。歳月が人を変えるってこと。まさか覚君がこんな呑気な生活をするなんて思わなかった。昔の友人に再会するとやっぱ人は変わっているってよく聞くわ、長い年月とそれぞれの生活があるんだもんね」

「それで、アフタートウェンティイヤーズなわけ？」

「もういいよ、さとちゃん、私ね、今付き合ってるっていうか付き合い出した変な男がいるのよ…」

「マキちゃん、高校出てから何度恋をした？」

「四・五回かな、でもさとちゃんは心のふる里、ほんとにいいやつ」

「なのにアフタートウェンティイヤーズなわけ？」

「年月が経っても状況は変わってもハートは変わらないってこと」

「ああ、それでアフタートウェンティイヤーズなわけね」

「さとちゃんうるさいよ、唯、今付き合い出した変な奴がいるってこと」

「マキちゃんが言い出したんじゃないか」

急に覚が私の手首を握りしめて、悲しそうな眼をした。人気のない公園を、日常の時の流れからはずれて、私達はゆっくりと歩き出した。私はその男のことを覚に話したかった。

その男、川田龍一と私が知り合いになったのは、ほんの数日前のことだ。何もかも洗い流してしまうかのように、いつ止むともなく雨がかなり激しく降っていた。行きつけのティー・ルームで、私は注文したカモミール・ティとババロア・カシスを待ちながら、

窓外にその雨を見つめていた。私のすぐそばの席を客が立つ気配がした。私が見つめていた雨からその席に視線を移すと、Ａサイズの茶色い封筒がポツんと置き去りにされている。背が低く太り気味の初老の男が、レジで勘定をすませて、透明なドアの外で傘を広げようとしている。私は思わずその封筒をかかえるように持ち上げて、その初老の紳士に小走りに近づいた。

「忘れ物じゃないですか」

男は驚いて、微笑みかけた。

「ありがとう」

私も少し微笑んで、「いいえ」と言ってから、カモミール・ティとババロア・カシスが気になって、すぐに席に戻ろうとした。男は言った。それが非常に大切な書類が入っていた封筒であったこと、それをもし失くしていたら数ヶ月後に定年なのに、その時手にするはずのすべての栄光を棒に振ることになっていたであろうことを。だから私が、彼の未だかつて出会ったことのない大恩人であるのだということを。もう一度私に逢いたい。もしかしたら、私が彼にとっての運命の人なのかもと言う意味のことを、彼は興奮して一気にしゃべりまくった。雨はかなり激しく降りつづいた。雨の音に声がかき消されないように、彼はボリュームを上げて語ったので、表を歩く人が何人か振り向いたり、私達の顔を覗き込んだりして通り過ぎていった。

その小太りの初老の紳士川田龍一と、私はその後一度、この前と同じティールームでお茶を飲み、別の店で豪華な食事をご馳走になり、それから一日おいて、彼は会社の帰り、私のアパートへ、大家さんの吉屋美代子さんに気付かれないように夜こっそりと訪ねて来た。私はこの街に一年間を過ごして少し疲れていたのかもしれない。果てしない街のユーウツと孤独は、私の胸に抱ききれない位疼き始めていた。川田龍一にふと見つけた安らぎと好奇心。

赤いギンガムチェックのフリルのついた私のベッドで、彼は一匹の野獣と化し数時間を過ごした。彼は肌着を着ける前にもう一度、私を抱きしめて、僕は君を宇宙の中で一番深く愛していると言った。私は多分、川田さんは恋などしたことはないのだろう、それでこんなセリフを、長い一生の内でせめて一度位、囁いてみたかったのだろうと思ったのだった。

私が彼にはかせて上げた黒い靴下は、ほんの少しつま先とかかとの部分が薄くなりかけているような気がした。多分彼の妻は、その靴下をもう思いきって捨ててしまおうかと思ったのだろうけど、せっかくのブランド物の靴下なんだからあともう一回位、破けずにははけるのではないかと判断して、更にもう少し思案して迷った後、洗濯機に放り込んだのだろう。それで案の定、破けずにこうやって川田龍一その靴下をはいている。

でもつま先とかかとが薄くなりかけた靴下を、彼は少し気にしているような気がした。妻を庇っているような、そんな気もする。

帰り際に川田さんはこんなつつましいアパートに君を住まわせておくわけにはいかない。宇宙で一番愛している君には、マンションの一つや二つ少し広めのを買って上げよう、お小遣いだっていっぱいあげなくちゃと言った。

川田龍一のことを私が話し終えると、覚はさっきよりももっと悲しそうな目をして、もう一度私の手首をつかみそれから私の手を握りしめた。そしてもっと悲しそうな目をした。昼になって二人でラーメンを食べ、又、公園に戻って、田舎の空のこと風のこと、そして二人で仰いだ星空のことなどおしゃべりをして、夕方早めにさよならをした。

大家さんの吉屋美代子さん達の集まると言う書店へ続く坂道を上りながら、私は、ふと思った。他の女に亭主を奪われる女ってどんな奴〜〜多分バカにして私は「奴」という悪い言葉を使ってしまったのだろう〜〜なんだろう。魚屋の前をゆっくり通り過ぎた。何だかグズでドジで鈍そうな女が魚の品定めをしている。なかなか決められそうにない。口紅もつけずに眠そうで、焦点の定まらない大きな目玉の鈍い光。こんな女だから、あの川田さんは、愛想を尽かしてしまったのだろう。でもちょっと待って〜〜。とろい女ってすごくかわいいって言うじゃない？　じゃあどんな女だって言うの？　他の女に亭主を盗まれるドジな奴は。あらあらキャリアウーマンぽいのが向こうから歩いて来たぞ。スピードをつけて坂道を下りてくる。よくぞ転ばずに高いヒールであんなに早足で歩けるものだ。アイボリーの半コートがかっこいいじゃない、スマートで。袋に手をつっこんで一日中駄菓子をポリポリ食べ続けている女のように肥ってなんかいない。あの女は亭主をわずらわしがって小馬鹿にしているから、彼は寂しかったのだ。うーんでもちょっと違うような気がする、しゃきっとした女は、今時女の理想像じゃない？　そんな女房がいるのに、宇宙の中で一番君を愛しているなんて、アホーなセリフを。川田龍一が若い小娘のような私に言うものか、じゃあどんな女かしら。まぬけな女は。まあいいだろう、人は人間関係はミステリアスなのが面白いと言うもの。まあいいでしょうと私は思いながら、坂道をどんどん上って、約束の本屋の二階の部屋を目指して歩いていく。

田舎でも都会でもない街〜〜そう昔は農村だったけど東京のベッドタウンになった便利な街。その街の結構粗末な本屋さん。一群の貸店舗の一角だが、お金をかけて手入れをする責任の所在がオーナーなのか借家人かははっきりしていないとみえて日毎に荒れていく感じだ。見た目は良くなくとも、ありとあらゆる雑誌もベストセラー本も揃っているから、本好きの吉屋美代子さん達はこの店が気に入っているのだろう。私だって一

応ここのお得意さんである。
　透明ガラスのドアを音もなく開けたのに、話し合っていた二人の女店員の一人が、私に気付いた。いらっしゃいませと一応言ったあとで、もしかしたら、白井マキさん？　吉屋さんから聞いていたわ、手伝って下さるんですってね。と言うより、お茶飲みしましょうと早口に言った。そして仕事の引継をしたらすぐ私も上がっていきますからねと付け加えた。二階に上がるのに、店の奥の方を通りに抜ける時、学習参考書やドリルが山と積まれているのが目に入った。だから彼女達のＰＴＡ時代からの出逢いの場だったのだろうと思った。
　二階の台所付き六畳二部屋は、西日のせいか、畳が黄ばんでいるのが目立った。でもよく雑巾がけが行き届いていて、小ざっぱりしていた。私はそんな畳を見ると、茶がらをまいて掃除をしていたきれい好きのばーちゃんをつい思い出してしまう。
　私も、吉屋美代子さんも、もう一人の婦人も目で微笑みあった。
「紹介しますわ。川田百合子さん」
「ＰＴＡのＯＢですね」
私はそう言うと、乙女チックな声を出して二人は笑った。その時、板がミシミシときしむ音がして、バタバタ足音をさせて上がってきたのは、塾の講師の井川真知子さんだった。
「一週間の内で今日だけしかあらへんのよ。こんなに早う終わる日は」
　それから私を見てにっこりして、吉屋さんのアパートに居やはるんやてねと言った。
　この集まりの時は、信子さんのキッチンにみんな自由に出入りしてお茶を沸かしたり、湯飲みやお盆なんかも遠慮なく借りているようである。部屋の主である信子さんが現れる前に、他の三人で、誰かの持参した手作りのアップルパイと自家製のお新香とそれにおせんべいと香りのいいお茶があっという間に、座卓に並べられた。働き者の三人に、私は感心してしまったのである。
　美代子さんがおせんべいをつまんだ。
「あら、あのお花なんて言うの」
　百合子さんが訪ねると、美代子さんは、おせんべいをボリボリかじりながら、レアシスア・ロンリー・コーラ・ベイルよと答えた。差し木も出来るようだ。
「よくそんな長い名前、覚えられるわね」
　百合子さんが感心している。
「へっちゃら。花の名前を覚えるのは、老化をゆるめるのに一番いいのよ」
　美代子さんがそう言うと、みんなくすくすと笑いながら、突き出た窓辺に置かれた鉢植えを眺めていた。実際には、その名のコーラの色よりもっと赤味を帯びた小さな愛ら

しい二輪の花が、みんなの視線を浴びてはにかんでいた。
「ほんとは初夏に咲くの。何故か今年は狂い咲き。何故か今年は狂い咲き」
みんなの話し声が聞こえていたのか、信子さんが、リズムをつけてそう言いながら、階段を上がってきて、座卓の前に座った時、みんなどっと笑った。多分狂い咲きという言葉がおかしいと言うかうれしかったのだと思う。私はこの六十近いこの人達に、何かに::別に恋とかじゃなくとも::狂い咲きして欲しいという願いのような思いをいだいた。家庭を築き子供達を巣立たせたその体力と知恵と創造力を主婦のパワーと言うなら、まだそのパワーは、むんむんと残りの部分の油ぎった匂いを放っている。
いよいよ、美味しいおやつや、お茶の香りと楽しい笑い声の中で、ボランティアの作業なるものが始まった。
みんなそれぞれ、お気に入りだった洋服のもう着なくなったのにハサミを入れて様々な大きさや形の布にして洗濯もアイロンも済ませた物を、持参してきている。コットンショップで買い求めた端切れもある。ボンドでそれらを箱に貼りつけていくのだ。
箱と言ってもその大きさは様々で、牛乳パックを底から三センチ位のところで切った小さな箱に小花模様の木綿なんてのは、とても愛らしい。輪ゴムを入れたっていいし、切手を入れたっていい。大きな物というと、牛乳パックを幾つか組み合わせて椅子が作れるそうだ。足腰が痛くて正座しにくい高齢者がお尻に当てる椅子だったり、座卓の前に座ると首だけしか出なくてその上のご馳走が見えないような年齢の幼児の椅子だったり、様々な用途の椅子を作るのだそうだ。何も牛乳パックとは限らない。ダンボールだって菓子折りだっていい。完成品の用途はいろいろに広がっていく。又この作業は、針を使うことはまれで、ボンドで貼りつけるだけだから不器用な人だって大丈夫なのだ。
おしゃべりを楽しみながら出来上った作品は、抱きしめたい位温もりがあって生活をあたたかく色どってくれそうだ。バザーでまたたく間になくなってしまうのもうなづける。
信子さんは、新来者の私が加わったことを繰り返し喜んでくれたあと、着替えるため、席を立った。しばらくして隣室から戻ってきた時、スカートが家庭着用パンツルックに変わっていた。
「本屋さんのレジに立つ時は、お客さんが本と出合うスローな時間。そんな時には淡い色合いのフレアスカートはぴったりなの。でもすぐ着替えておかないと服の消耗が早いからね。」
自分のポリシーを堅持している信子さんの言葉をみんなシーンと聞いている。そう決めてかからなくとも、店では物を運ぶ作業もあるのだからジーパンでもいいと思うけど、一人で、たった一人で人生のある時点から生活してきた信子さんは、誰がなんと言おう

と大きなことから小さなことに至るまで自分の流儀を持たないと流されてしまうのだろう。それに比べて私の大家さんの美代子さんや百合子さんは、自分のポリシーは、花嫁衣裳の角隠しの如くそっと隠して流されているふりをしながら人を受け入れていかねばいけないような人生を送っているのだろうと、私は思う。だってタローだって脱走したのにご主人だって蒸発しちゃったのに、いつまでも根気よく待って、待ちながら、大抵一日中微笑んでいる。ほら今だって、信子さんが着替えたりしていたのを、ほんとに物を大切にしてお偉いことでも言うような表情で微笑みながら見ていたようだ。

右手を伸ばしておせんべいを一口頬張ると、左手で適当な布を選んで、おせんべいの粉のついた右手でボンドを持つ。簡単でしょう？　って美代子さんが私に話しかけ、百合子さんもうなずきながら私を見て微笑む。

「ほんとに楽しいですね。私用のも作っちゃっていいですか」

私は少しはしゃぎすぎ、そしてこの一見まだ若そうだが、近くで見ると過ぎ去ってしまった日々を感じさせる彼女達の生活や個性に、深い興味というか観察力を働かせつづける。

「来週、ここ、お休みにしますさかい、かんにんね、旅行に行くさかい。おみやげ買ってきます。マキさんにもね」

「あらどこへ？」

「イギリスやねん」

「イギリス！　私もその内行きたいわ」

美代子さんと百合子さんが少し頬を桜色に染めた。二人共もうすぐ主人が定年になるのでその記念に夫婦で行ってきますわと興奮したように話す。早く蒸発した御主人が戻ってくるといいですねと、私は切に願う。

「ヒースの荒野の入ったコースがやっと見つかったの。私ね、ブロンテ姉妹の作品が少女時代から好きやったの。中学生の時ね、いつでも夜眠る前に眼を閉じるとヒースの荒野が浮かんできたの。無論、作品とか、解説の文章から想像した荒野やけどね。私、寂しがり屋の少女やったさかいそれで心が、今流行の言葉で言うたら癒されてん…」

みんな何故かシーンとなってしまった。白けてしまったのかしら。

眞知子さんは続ける。

「そこに旅行できたら、あの頃の少女に約束を果たせたことになるねん。私の中のあの日の少女に」

ちょっとキザじゃないですかと私は思う。一体アンタ、齢いくつなのよと私は心の中で苦笑した。

黙って聞いていた信子さんがこわばった顔つきで言った。

「旅行するって眞知子さんどなたと？」
「大学時代の友人三人で二十人のツアーに申し込んだんよ」
息子さん達はみな自立してしまっているのだろう。会社勤めのご主人は快く留守番を引き受けてくれると言う。留守は誰が守るのか、まあそのことがその場の三人の〝〝私は例外〟〟関心の的だったようだ。
「いいわねえ、さすがに仕事を持って経済的に自立しているのだから、眞知子さんはいつも自由に行動を起こせるのよね、やっぱり、私達とは根本的に違うところがある…」
美代子さんがしみじみと言って、百合子さんも一人で頷いている。布張りというチャーミングな手仕事の先に予期せぬ発見や、私自身が深い思いに誘われるきっかけや、女の心に巣くう何かが待っていそう。
酔っているわけでもないのに、信子さんは目がすわりはじめ、濃いグリーンの布にザクザくハサミを入れていた手を休めて、まくしたてた。腹の虫がおさまらなくなった様子だ。
「眞知子さんは自立しているから何をしようと許せる。あのねぇ、まだ男性はねえ、今時、リストラだの何だのあってそれで大変だし成長もあるって言うものだけど、女はダメね、専業主婦はほんとに成長がない、ほんとにくだらないわよ、いつもいつも話してることが。一体どの位ご主人を大切にしていますかってこと。甘っちょろい、あなた達専業主婦は。ご主人おっぽり出しておいて、こんなところでお茶飲んだりしてさ」
「夫がリストラされたら運命共同体だから妻だってリストラの苦しみは味わうんよ、あなた、何も分かってへんやないの」
眞知子さんがやり返す。
百合子さんは、信子さんの言っていることをきちんと整理して、理解しなければと思ったのか、急に難しい表情になり、頭を働かせ始めた様子だが、なんだか迷路にしゃがみこんでしまった様子。美代子さんがかっとなってまくし立てた。
「あなたはね、信子さん、気に入らないからってご主人の許を離れて堂々と離婚して一人で立派に働いてきたんだから偉いんじゃない？　それはそれで。難しい年齢の子供さんを、せっかく生んだ息子さんを寂しい思いさせて。でも自分で選んだ道でしょう？　専業主婦に謂われのないケチをつけてばかりね。嫉妬してるんでしょう？　後悔してるんでしょう？」
「妬いてなんかいないわよ、専業主婦はくだらないのに、いい気になって生意気だって言ってるだけ」
眞知子さんの旅行の話しを皮切りに、信子さんは専業主婦攻撃に走っている。本の好きな信子さんは、毎日機嫌よく本屋さんで働いていたのに、彼女の言葉を借りれば遊び

喰いをしている二人の専業主婦のことが急に気になり出して、自ら捨ててしまった生活を、取り返しのつかない過去を、たまらない位後悔しているのではないだろうか。信子さんの離婚ってその程度のものだったのか。

信子さんが美代子さんに言われた腹いせとばかり、隣に座っている眞知子さんに耳打ちする。

「美代子さんのご主人は家出したらしいわよ」

六畳の和室の真ん中に置かれた座卓の一方の端っこでヒソヒソ話していることが、それをはさんでその正面にいる美代子さんの耳に、例え六十才近くなったために多少耳が遠くなりかけていたとしても聞こえないはずはない。この年代の女ってこんなに意地の悪いものなのだろうか。私は自分自身の奥深く、彼女らと同じような業をまさぐりながら、激しい嫌悪感に襲われていた。

百合子さんが、もうおやめなさいよ、今日に限って、いつも仲良く穏やかにやってきたのに、若いマキさんに恥かしいわ、なんて言っている。百合子さんだって何を感じているか分かったものじゃない。

百合子さんはもしかしたらこんな風に言いたいのではないだろうか。専業主婦は遊び喰いなんかしていないわ。私は専業主婦が好きで誇りなの。自分で結婚生活をすてて、又それを後悔するどころか他人にケチをつけたり嫉妬したりするなんて最低よと。私の思い過ごしだろうか。そしてとうとう、百合子さんも少し顔を赤らめて言った。

「専業主婦だって一人前なのよ。外で働いていなくたって、決して半人前じゃないわ」

外で働かなくとも二分の一ではなく、れっきとした一かもしれないと、私も思った。

突然、眞知子さんが真剣な顔つきになって語り出したのである。

「扶養控除が無くなるんやて、妻は。夫婦別姓かてその内当たり前になるでしょうよ。年金は離婚しても半分は妻の権利なんよ、今度の改革案が通ったさかい。夫の育児休暇も充実してくんのちがうかしらん。なんやどんどん変わってくるやんか妻の周辺ちゅうもんが」

さすが眞知子さんだ。

「今までだって、女も一人前だわ、夫婦だって。それが法律で認められていくってことでしょう」

百合子さんもさすがだ。ぼっちり言ってのけた。彼女、結構気が強いのかしら。それから眞知子さんが思い出したようにつけ加えた。

「権利をいろいろ与えられるってことは責任を持つってことなんよ、専業主婦かて結婚生活のお客さんではなくなる。甘えてはいられない。れっきとした一人前になっていくんやんか」

「妻は二分の一ではなく一なの、一にならなくてはいけないのよね、実質的にも法律的にも」

美代子さんもさすがだ。そして彼女は言い続ける。

「何も信子さんだって、離婚する力があったなんてすごいじゃないの、人を侮ったり自分を卑下するのはよくないわ」

信子さんは目に涙を溜めてしまった。胸を張ればよい。しかし、誰だって一になることは出来ても、夫の一に足して二人で二ではなく不思議な一をつくるその魅力は、その不思議な力は、決して喜びだけではなく、多くの苦労を乗り越える中で、勝ち取るものなのだと、みなでしみじみ話し合っている。信子さんは少し寂しそうだ。こんないじらしい彼女に誰がこれ以上、いじけるなんてエゴにエゴを重ねるようなものだなどと理屈をなげかけることが出来ようか。みんな本当は信子さんを抱きしめたいと思っているような気がする。

私には、足して一になる不思議な一を求めて、それがいかに素晴らしい得も言われぬものであろうとも、結婚生活というものに飛び込む自信がないのだ。結婚してもしなくともいい時代に生まれてきて、思い切れないのだ。彼女達だって、考えてその道を選んでそうしたのではなかっただろう。世間法のエスカレータの流れの中で当然みんな結婚したのだ。そんな時代だったということと、私の気持とを彼女達は分かってくれているのだろうか。まっ、いっか！

私は、今夜又私のアパートへ、大家さんの目を盗んで訪ねてくる川田龍一のことをふと思い出していた。そして川田百合子さんと同じ姓だと気付いた。まさか二人が夫婦ってことはあるまい。今朝何気なく電話帳で、川田と言う名を調べたら〜〜植木屋さんで個人名、企業名のを共に借りてきたのだ。歯医者とかを調べておこうと思って〜〜この街には川田と村井と坂口が多いと聞いていた通り、川田も三十軒以上あった。川田龍一の勤め先の銀行には電話をして話したことは何度かある。夫婦かどうか調べる方法はいくらでもある。簡単なことだ。住所か電話番号を両人から聞けばいいだけだ。でも人は、人と人との関係はミステリアスな方がいい。そう、ほんとにミステリアスな方がいい。まさか！　だって、この街には村井も坂口も川田だって三十軒以上もあるのだから。人はミステリアスな方がいい、私は繰り返し心の中でそうつぶやいた。

こんなにみんな言いたい放題大声を張り上げておいて、再び集うことが出来るのかしら、私には分からない。多分大丈夫な気もする。みんなボランティアをやっているのだから。みんな本音でケンカしてたんだから。みんな涙を浮かべていたんだから。

本屋の前で彼女達にさよならをした。魚屋の前を通って坂を下っていると川田百合子さんもこちらに歩いてきた。

淡いブルーグレーの低い山並みがどこまでもつづいて美しかった。私が足早に歩くので、赤い夕日が、まるで燃える火の塊のようにコロコロ転がるようにその山並みの上を動いていった。

「今夜は何のご馳走に、なされるのですか」

少し振り返って、私は話題を見つけようと、何となく百合子さんに話しかけた。

「今夜の夕御飯はクリエイティブにやりますわ」

「創作料理なんて、すごいですね」

百合子さんは年甲斐もなくいたずらっぽく、くすっと笑ってから言った。

「冷蔵庫の中の残りものを全部組み合わせるってこと。クリエイティブにやりますわね」

足の遅い百合子さんにいつまでも付き合ってはいられない。私は丁寧にさよならをして、駆け出した。低い山並みのブルーグレーはどんどんとその濃さを増していった。そしてその上を火の塊のような夕日が、コロコロ転がり続けていく。私とかけっこしているような夕日。あの男に今夜はどんなおつまみを作ってあげようか。

川田龍一が、ドアを小さくノックして訪ねて来たので、私は、ゆでだこの足を一本、まな板の上に置き去りにしたまま、彼を部屋の中へ迎え入れた。そして私は言った。

「私ね、この間の時、赤ちゃんが出来たような気がしてるの」

彼はぎょっとして、それから困惑はたちまち蔑みと憎しみに変わり、氷よりも冷たい視線を私の隅々にまで投げかけた。私は凍りついて身動きが出来なくなった小さな虫のように怖じ気づいた。私は、今夜はちょっと川田さんをこらしめてやろうと作り話をしただけだった。もう一つウソをついてやろう。

「ウソだってば。恋人の覚君の子が出来たかもしれないの、私は生むの、田舎に帰るわ」

私はこの作り話が本当だったら、やはりうれしいのではないだろうか、きっと。

靴を履きかけている川田龍一に、私は、細長くて白い整理ダンスの上の引き出しから、この前彼が無理矢理に私の手に持たせた札束の入った封筒を出してきて、差し出した。

「川田さんが楽しんだかもしれないけど、私も楽しんだから、私も川田さんにお金払ってあげる」

ちょっと言いすぎたかもしれないと思って、私は言い直した。

「これ、お返しします」

彼が、無表情で、黙ったままドアを開けたその時、私は封筒を彼に押しつけた。閉めたドアののぞき穴から外を見ると、星の光と鈍い外灯の灯りが混ざり合って、ヒラヒラと夜風に一万円札が舞う中を、彼の後姿が、階段の下に消えていった。どこへ行くのだろうか。

新芽の出る春になると、もう植木屋さんの仕事は少なくなるだろう、やがて夏、私は仕事を探し始めることになる。あのおばさん達の内の誰かが言っていた言葉が、私の耳に甦る。〜〜主婦はね、夏の風鈴のようなもの、あんまり音高くひっきりなしに鳴り響いたら風情にならないの、ほんの少しの風に、思い出したように、リン、リン、リンと鳴るのがすてき、でも風鈴のない夏なんて…ね、私は二分の一じゃなくて一よ、一人前よなんて、わめき立てる必要もないもの〜〜足して二ではなくて一になるその一の味わいを知っている彼女、それを勝ち得た彼女の強さだろうか、充実だろうか、そしてそれは、あのおばさん達だけの世代の神話だろうか、それともいつまでも続いていく真実だろうか、私にはわからない。

完